広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部　第51号　2002　375－380

幼児の向社会的行動方略の生起過程

― 自発的に思いやりを表現することの難しさ ―

若　林　紀　乃

(2002年9月30日受理)

The process of how to build prosocial behavior in preschool children
— The difficulty of spontaneous expression of prosociability —

Sumino Wakabayashi

To clarify the process that preschoolers' prosocial behavior occurs, with the existence of troubled people, a naturalistic observation was conducted on 47 preschool children for a period of 45 (15minutes × 3) minutes. Children were observed and the records show in some episodes where the existance of troubled people caused a drastic change in the children's prosocial behavior. In those episodes, the categorized prosocial behavior was analyzed in a series of order to show the process that preschooler's prosocial behavior occurs. Also, it was analyzed whether the categorized prosocial behaviors were effective. The results show that the preschoolers tried to solve the situation by combining some, though limited, strategies. However, the results also show that spontaneous prosocial behavior did not work as effective as the one occured on request by troubled people or teachers and spontaneous expression of prosociability towards troubled people was difficult for the preschoolers. Some were also not very effective in practicing prosocial behavior, although they tried to help the troubled people by combining a variety of different strategies. It remains as a future issue as to how we provide educational support to those preschoolers.

Key words: prosocial behavior, preschool children, naturalistic observation
キーワード：向社会的行動，幼児，自然観察

問題と目的

日常生活において幼児は，目の前の困窮者の存在に気づいた時，あるいは困窮者に助けを求められた時，幼児なりに試行錯誤しながらその困窮者に対して向社会的行動を生起しようとする。しかし，必ずしもその向社会的行動が困窮者に対して効果的に働くとは限らない。

人間はすべて，生得的に向社会的気質をもっているといわれている（Sagi, & Hoffman, 1976)。しかし，幼児の中には，たとえば困窮者に対して全く同じように共感の気持ちを抱いたとしても，それをうまく表現できる子とできない子がいる(祐宗・堂野・松崎，1983)。幼児の示した向社会的行動を，前後の場面の文脈とともに明らかにしていかなければ，思いやりの気持ちを持って困窮者に関わろうとした幼児の行動が困窮者の存在場面に効果的に働かなかった場合，その幼児の向社会性を過小評価してしまうことにもなりかねないだろう。幼児が示す向社会的行動を，困窮者の存在場面の問題に対する，幼児なりの解決の結果としてあらわれた反応とみなし（中澤，1995)，たとえその向社会的行動が場面の文脈にとって適切でない場合であっても，内面に湧き上がった思いやりの気持ちを汲み取っていく必要があるのではないだろうか。その上で，思いやりの気持ちはあるものの，その表現・行動が伴わない子どもに対して何らかの教育的示唆を与

えていく必要があるだろう（池島，2000）。そこで本研究では，自由遊び場面において，幼児が困窮者の存在場面の問題を解決に導こうと関わった行動を全て向社会的行動として捉える。その上で生起した向社会的行動を，困窮者の存在場面の文脈とともに捉え，困窮者の存在場面に対して向社会的行動方略がどのように生起しているのかについて検討する。

ところで，そもそも前述のとおり同じように向社会性を持っていたとしても，それを上手く行動に移せる子とそうでない子がいるにもかかわらず，これまで表現される向社会的行動方略そのものに注目した研究はほとんど行なわれてこなかった。その中で，若林（2002）は，困窮者の存在場面において生起する向社会的行動方略そのものに注目し，幼児によって生起される多彩な向社会的行動方略を明らかにした。そして，場面にとって不適切ながらもその幼児なりの表現で困窮者に対して向社会的行動を示そうとしている場合があることを見出した。しかしその一方で，向社会的行動方略に関して，困窮者の存在場面の解決に直接関連した行動のみをカウントしており，どのようにして困窮者の存在場面に関わることになったのか，解決に導くまでにどのような向社会的行動方略選択の経緯をたどったのか，などを分析していないため，幼児なりに思いやりを示そうと工夫している姿を捉えきれずにいる。すなわち，向社会的行動方略に注目し，向社会的行動を場面と対応させて検討してはいるものの，その文脈の始まりと経緯を含む一連の流れの中で向社会的行動を捉えていない。

この点に関して，例えば，Cauley, & Tyler（1989）は向社会的行動の始まりに注目し，幼児の向社会的行動が自発的に生起したものか依頼されて生起したものかで分類した上で，自発的に生起したものの方が，効果的に働く割合が高いことを結論づけた。また，向社会的行動の生起過程に注目した研究では，幼児が向社会的行動を生起する際には援助の仕方を工夫しなければいけないことを知っていること（Barnett, Darcie, Holland, & Kobasigawa，1982）や，被援助者のリアクションを見ながらより効果的に困窮者の存在場面に関わろうとしていることなどが示唆されている（Eisenberg, Cameron, Tryon, & Dodez，1981）。

しかし，これら従来の研究はいずれも向社会的場面における幼児の向社会的行動を断片的に捉えたにすぎない。さらに言えば，実際に生起した向社会的行動を分析する際に，向社会的場面において向社会的行動の結果のみに注目しているため，不適切ながらも示す向社会的行動を含む幼児の思いやりの全容を把握しきれていない可能性も考えられる。

翻って考えると，我々大人は，これまでの多くの研究と同様に，日常生活において断片的な一部の行動のみで幼児の向社会性を判断しがちである。工夫して表現した向社会的行動が効果的に働くことを経験した幼児は，高く評価され自信をつけていくだろう。しかし，工夫して表現した向社会的行動が失敗に終わってしまった幼児は，思いやりを上手く表現できず，かつ周囲の大人からも思いやりの気持ちを汲み取ってもらえなかった経験から，自分の思いやりの気持ちに自信を持てなくなる恐れもある。しかし，たとえその向社会的行動がその場面において間違っていたとしても，その行動を生起するに至った経緯から思いやりの気持ちをもったことを賞賛され，その上で改めて適切な対処の仕方を教えてもらっていたならば，自分自身の「人を思いやる気持ち」にいつまでも自信を持ちつづけることができ（Mill, & Grusec，1989），いつでも思い切って他者のために働きかけることができると考えられる。だからこそ，日常生活にて生起される幼児の向社会的行動を一つ一つ場面の文脈の一連の流れから捉え，効果的に示される向社会的行動だけではなく，思いやりを表現しようとしても失敗してしまう場合についても検討していく必要があると考えられる。

以上より，本研究では，１つ１つの困窮者の存在場面に対して幼児が関わる姿を生起のはじまりと経緯を含む一連の流れから分析することにより，これまでほとんど捉えられてこなかった幼児の向社会的行動方略の生起過程について検討し，幼児なりに工夫した思いやりがなぜ失敗に終わってしまう場合があるのか，その原因を探る。

方　法

観察対象児　大阪府内の保育園に通う４歳児クラス23名，５歳児クラス24名，計47名であった。

観察時期と手続き　６月から８月中旬の間に１日２時間（夕方の自由遊び時間），週３－４日の割合で，ビデオ撮影と観察ノートを併用し自然観察を実施した。観察記録が，観察対象児のその日の機嫌や遊びの種類に影響をうけないように，15分の観察記録を３回ランダムに別々の日にとり，１人につき合計45分の観察記録をとった。

分析方法

(1)向社会的場面と向社会的行動　若林（2002）のカテゴリーに基づいて，１人あたり45分の観察記録の中で，その個人の周囲に出現した向社会的場面（困窮者の存

在場面）をエピソードとして記述し，そのエピソード数をカウントした。そして，その場面に対する向社会的行動の生起，生起した場合その向社会的行動の方略内容を分析した。その際，同一の向社会的場面に対して何種類かの向社会的行動方略が生起した場合は，それらの行動が生起した順に番号を付けてチェックした。

(2)向社会的行動のはじまり　生起した向社会的行動が，自発的に生起したものか，あるいは被援助者または第3者に依頼されて生起したものかを判断した。なお，被援助者または第3者に援助するように直接声をかけられ，頼まれたものを「依頼」とし，それ以外のものを「自発」とした。

(3)向社会的行動の効果　生起した向社会的行動がその向社会的場面の文脈にとって効果的であったかを査定した。その際，同一場面に対して何種類かの向社会的行動が生起していた場合は，それぞれの行動について効果的であったかを査定するとともに，最終的に効果的であったかを査定した。効果的であった向社会的行動には○の記号を，効果的でなかった向社会的行動には×の記号をチェックリストに記入した。なお，場面の文脈上その向社会的行動が効果的であったかを以下のような操作的定義を設定し分析した。

○被援助者の反応が肯定的であったり（例えば，笑顔になる，元気に遊びだす，作成物が完成する，など），援助者と被援助者を含む周りの状況が，援助者の行なった向社会的行動によって進展した場合，効果があるとする。

○相手に気づかれなかったり，否定的な反応をされたり，周りの状況にとって文脈を妨げるもの（例えば，遊びが終わってしまう，さらに状況が悪化する，など）であった場合，効果がないとする。

(4)効果的な向社会的行動を選択する幼児の分類　それぞれの幼児について，生起した向社会的行動が最終的に向社会的場面に効果的に働く割合を効果％として表し，それを角変換後の平均値にて，効果的に向社会的行動を選択することができる幼児（効果％高群）と，できない幼児（効果％低群）に分類した。その上で，前述の(1)(2)(3)について効果％高群と効果％低群とを比較した。

結果と考察

向社会的場面に対して生起した向社会的行動

全体で出現した向社会的場面のエピソード417のうち，176のエピソードにおいて実際に向社会的行動が生起した。そのうち18のエピソードでは，同一場面に対して2種類の組み合わされた向社会的行動が生起していた。

向社会的行動のはじまり

全体で実際に向社会的行動が生起した176のエピソードのうち，自発的に向社会的行動が生起していたエピソードは116，被援助者に依頼されて向社会的行動が生起していたエピソードは60であった。

効果的な向社会的行動

実際に向社会的行動が生起した176のエピソードのうち，最終的に向社会的行動が向社会的場面にとって効果的であったエピソードは142であった。そのうち15のエピソードでは，同一場面において2種類の向社会的行動を組み合わせて用いていた。

効果的な向社会的行動を選択する割合

幼児を効果％の全体の平均より高い効果％高群の幼児28名（4歳児12名，5歳児16名）と，平均より低い効果％低群の幼児19名（4歳児11名，5歳児8名）に分け，向社会的行動方略の選択経緯を比較した。詳細をTable 1に示す。

なお，効果％は分布に偏りが見られたため角変換（$X' = \sin^{-1}\sqrt{P}$）したのちに平均した（平均64.3%，SD＝26.4）。

Table 1から，被援助者から依頼されて向社会的行動を行う場合に，その行動が最終的に場面にとって効果的ではない行動になってしまう(60のエピソードのうち1)よりも，自発的に向社会的行動を行う場合に，その行動が最終的に効果的でない向社会的行動になってしまう（116のエピソードのうち33）ことの方が多かった。この結果は，従来の研究（例えば，Cauley, & Tyler, 1989）における，自発的な思いやりほど効果的に働きやすいという見解とは一致してないものであった。従来の研究は，分与などの分かりやすい行動の有無のカウントのみで幼児の向社会的行動を測定していた。自発的に他者に物を分け与えた場合，被援助者にとって物をもらうことに比較的抵抗は少なく，分与すること自体は効果的な向社会的行動となりやすいと思われる。しかし，日常生活における困窮者は，分与のような単純な向社会的行動ばかりを求めているわけではない。本研究のように，日常生活の中の複雑な困窮者の存在場面に対して，幼児がさまざまな形で思いやりを表現しようとしている姿を捉えると，自発的にかつ被援助者にとって効果的に思いやりを表現するということは幼児にとって非常に困難であると考えられる。

Table 1．実際に生起した向社会的行動（エピソード数）

自発	○	○→○	×→○	計	×	×→×	計	合計
効果高群	56	6	1	63	2	0	2	65
効果低群	18	2	0	20	28	3	31	51
全体	74	8	1	83	30	3	33	116
依頼	**○**	**○→○**	**×→○**	**計**	**×**	**×→×**	**計**	**合計**
効果高群	39	3	3	45	0	0	0	45
効果低群	14	0	0	14	1	0	1	15
全体	53	3	3	59	1	0	1	60

（○）効果的な向社会的行動　（×）効果的でない向社会的行動
（○→○）２種類の効果的な向社会的行動を組み合わせている
（×→○）効果的でない向社会的行動の後，効果的な向社会的行動
（×→×）効果的でない向社会的行動を続けている

さらに，このことは効果％低群（33のエピソードのうち31）において顕著であり，効果％低群の場合，同一場面に対して効果的に働かなかった自発的な向社会的行動を修正しようと，もう一つの向社会的行動を組み合わせて生起したとしても，そのすべての行動が効果的でない行動になってしまっていた。

そこで次に，困窮者の存在場面に対して効果的に向社会的行動を表現することができない幼児にとって，自発的に思いやりを表現することがなぜ困難なのか，なぜ方略を組み合わせ工夫しているにも関わらず，その行動が場面の文脈にとって効果的でなくなってしまう場合があるのか，効果％低群の幼児の典型事例と効果％高群の典型事例を比較することで探索的に検討する。なお，それぞれの対象児のチェックリストを巻末資料に提示する。チェックリストについて，向社会的場面には，最終的に向社会的行動が効果的に働いた場合（○），最終的に効果的でなかった場合（×）の記号を記し，向社会的行動には，行動の生起順序として①②，その向社会的行動方略が効果的であった場合（○），効果的でなかった場合（×）の記号を記している。さらに，チェックリストの網掛け部分は，事例１，事例２，事例３に相当する。

［効果％低群］

事例１

対象児Ｙくんは亀の水槽の側にいた。そこに亀にえさをやろうとＥちゃんがやってきた。Ｅちゃんはえさをやった後，そのえさのほとんどが石と石の間に入り込んでしまったのを見て石を他の場所に配置しなおそうとしていた。しかし，石を上手く配置変えできずにいた。それを見ていたＹくんは，代わりに石を動かしてやろうと横から手を出した（①助力）。するとＥちゃんは「自分でやるんやから！」と嫌がった。しかし，Ｙくんはその後も「なんでや，こっち端に置くねん!!」「こっちに置ける」などと繰り返し口を出し（②強い口調の助言），余計煙たがられてしまった。最終的にＥちゃんは石を水槽の外に出して怒った顔をして行ってしまった。

［効果％低群］

事例２

対象児Ｒくんは水道でバケツに水を入れていた。そこにケチャップの空き容器を持ってＳくんがやって来た。Ｓくんはケチャップ容器に水を入れようとしていたが上手く入らない様子であった。それを見ていたＲくんはＳくんが流している水道の水を細めてあげた（①助力）。突然細められたＳくんはムッとした顔をしてＲくんの手をはねのけ，水道水を強めに出した。それでもＲくんは，「もっと水道に近づけたらええんよ」とさらに教えようとした（②助言）。しかしＳくんは「ええやん。これで」とＲくんを無視した。結局Ｓくんはその後もＲくんを煙たがり，時間はかかったものの，自分なりのやり方で容器に水を入れていった。

事例１，事例２から，困窮者の存在場面に対して効果的に向社会的行動を表現することができない幼児は，困窮者に対して何かをしてあげようという気持ちを，直接行動で示すことで表現してしまっていることが伺える。そして，そのことが間違っていたと判断し，違った方略で対処し直そうと工夫したとしても，似たような行動方略を立て続けにしてしまうために余計煙たがれてしまっていたと考えられる。

［効果％高群］

事例3

対象児Eちゃんがホールで遊んでいた。その側に，大きな遊具が収納されているところに風船が挟まってしまったNちゃんがいた。Eちゃんはそこに近づき「そういうのは，棒でとったらええんよ」と声をかけた（①助言）。NちゃんはEちゃんに対してうっとうしそうに無視をした。その後しばらくしてNちゃんは自分で思いついたかのように，近くにあったほうきの柄で風船をつつきはじめた。しかし，風船は取れないどころか割れそうになり，Nちゃんは泣きそうになってしまった。Eちゃんは少し考えて，「待ってて」といって先生を呼んできた（②助けを呼ぶ）。先生は手を伸ばして風船をとってくれた。Nちゃんは笑顔でEちゃんと遊んだ。

事例3の対象児は，事例1や事例2の幼児と同様に，直接口を出して困窮者に関わろうとした事例である。しかし，事例1や事例2と異なり，それが失敗であると気付くと困窮者と少し距離をおき，違った方略を考えているようであった。その結果，自分の援助能力などを考慮して，困窮者にとって最も良いと思われる方略を探し，最終的には効果的に困窮者の存在場面を解決に導いていたと考えられる。

総合考察

本研究の結果から，幼児が自発的に向社会的行動を生起する際，困窮者にとって効果的に向社会的行動を表現することは非常に困難であるということが明らかにされた。有馬・相川（1983）によれば，年少の幼児はいかなる状況であっても困っている他者に対して直接的に介入してしまう傾向が強いといわれている。依頼されて生起する場合は相手も援助をうけることを前提としているため，直接的な関わりであっても効果的に働くと予想されるが，自発的な向社会的行動の場合は，このような直接的な介入は被援助者にとっておせっかいともなりかねない。被援助者の能力や，自分自身の援助能力なども考慮に入れ，他に助けを呼んだり，被援助者の様子を見守るなど，間接的な援助方略を身につけていくことも重要であるように思われる。今後幼児の間接的な援助についての認識などを検討していく必要があると考えられる。

さらに，効果的な向社会的行動が不得手な幼児は，はじめに生起した向社会的行動が不適切で，その後違った方略を工夫して生起しようとする場合，同じような方略を立て続けに生起し，場面の文脈を余計混乱させていた。自発的に示す思いやりは必ずしも被援助者が求めているような行動であるとは限らない。被援助者にとって自分の向社会的行動が効果的でなかった場合，改めて効果的な向社会的行動を生起するためには，被援助者から一旦離れ，その場面の情報を処理し直す能力を備える必要があるだろう。その上で，自分には何ができるのか，被援助者にとって最も効果的な向社会的行動方略は何であるかを模索する能力が必要となってくるだろう。

今回は少数事例から探索的に検討したため，自発的な思いやり表現の困難性の原因を一概に一般化することはできない。しかし，本研究におけるこれらの知見は，日常場面における幼児の向社会的行動の生起過程を1つ1つ詳細にチェックしたことから明らかになったものである。幼児の向社会性は必ずしも我々が考えるような文脈に沿った形として表現されるとは限らない。1つ1つの行動を前後の場面の文脈から詳細に検討していくことによって，幼児の本来の思いやりの気持ちを汲み取っていくことも重要なことである。

【引用文献】

有馬道久・相川充　1983　効果的援助におけるメタ認知的知識について　広島大学教育学部紀要　第一部（心理学），**31**，213-220.

Barnett, K., Darcie, G., Holland, J. C., & Kobasigawa, A. 1982 Children's cognitive about effective helping. *Developmental Psychology,* **18,** 267-277.

Cauley, K., & Tyler, B. 1989 The relationship of self-comcept to prosocial behavior in children. *Early Childhood Research Quarterly*, **4**, 51-60.

Eisenberg, N., Cameron, E., Tryon, K., & Dodez, R. 1981 Socialization of prosocial behavior in the preschool classroom. *Developmental Psychology*, **17**, 773-782.

池島徳大　2000　思いやる気持ちをどう表現するか－行動が伴わない子への援助　児童心理，**53**，1196-1201.

Mills, R., & Grusec, J. 1989 Cognitive, affective, and behavioral consequences of praising altruism. *Merrill-Palmer Quarterly*, **35**, 299-326.

中澤潤　1995　問題解決としての社会的行動　二宮克美（編）たくましい社会性を育てる 第8章　有斐閣　Pp.115-132.

Sagi, A., & Hoffman, L. M. 1976 Empathic distress in the newborn. *Developmental Psychology,* **12,** 175-176.

祐宗省三・堂野恵子・松崎学 1983 思いやりの心を育

てる－幼児期からの人間教育－　有斐閣新書
若林紀乃　2002　自由遊び場面における幼児の向社会的行動－状況と選択される行動からみた発達の特質－大阪教育大学大学院教育学研究科修士論文（未公刊）

（主任指導教官　山崎　晃）

付記　本論文をまとめるにあたり，ご指導頂きました広島大学教育学研究科　山崎晃先生に深く感謝致します。また，データ収集にあたりご協力頂きました大阪府内の保育園の先生方，園児の皆様に厚くお礼申し上げます。

【巻末資料】

対象児Ｙ（男児・５歳８ヶ月）のチェックリスト

事例No.	1	2	3	4	5
向社会的場面					
物質的困窮者の存在				○	
労力的困窮者の存在	×	○			×
仲間入り場面					
泣いているこの存在					
嫌悪を抱く子の存在					
負傷者の存在					
危険な場面			○		
その他困窮者の存在					
向社会的行動					
物質的援助				○	
助力	①×	○			②×
助言					①×
強い口調の助言	②×		○		
協力・協同					
助けを呼ぶ					
代行					
言語的慰め					
非言語的慰め					
方略数	2	1	1	1	2
はじまり	自発	依頼	自発	自発	自発

対象児Ｒ（男児・５歳３ヶ月）のチェックリスト

事例No.	1	2	3
向社会的場面			
物質的困窮者の存在			
労力的困窮者の存在	×	○	○
仲間入り場面			
泣いているこの存在			
嫌悪を抱く子の存在			
負傷者の存在			
危険な場面			
その他困窮者の存在			
向社会的行動			
物質的援助			
助力	①×	○	○
助言	②×		
強い口調の助言			
協力・協同			
助けを呼ぶ			
代行			
言語的慰め			
非言語的慰め			
方略数	2	1	1
はじまり	自発	依頼	依頼

対象児Ｅ（女児・６歳３ヶ月）のチェックリスト

事例No.	1	2	3	4	5	6
向社会的場面						
物質的困窮者の存在	○			○		
労力的困窮者の存在		○	○			○
仲間入り場面						
泣いているこの存在						
嫌悪を抱く子の存在						
負傷者の存在						
危険な場面					○	
その他困窮者の存在						
向社会的行動						
物質的援助	○			○		
助力		①×				○
助言					○	
強い口調の助言						
協力・協同			○			
助けを呼ぶ		②○				
代行						
言語的慰め						
非言語的慰め						
方略数	1	2	1	1	1	1
はじまり	自発	自発	自発	自発	自発	自発